

L・ヒューバーマン, P・M・スウィージ
—共著

『キューバ』

—1つの革命の解剖—

L. Huberman & P. M. Sweezy. *Cuba, Anatomy of a Revolution*, 1960. 池上幹徳訳, 1961年, 岩波書店, 岩波新書 401, viii+329 p.

経済発展の理論は、それが現代経済学の方派として発生した場合、近代社会、すなわち貨幣を媒介とする財貨およびサービスの交換と、完全競争の存在とを理想型とする社会において、とりわけ経済的な現象を説明するにふさわしい諸変数、それらの変動の時系列、および変数相互間の函数関係を中心とし、これをそのまま低開発社会にもあてはめて説明しようとする傾向があった。

いうまでもなく Klein, Kosobud のいう great ratios (Q. J. E., May, 1961) やその他の比率をとれば、発展した社会と低開発社会のそれぞれにおいて、経済的諸変数およびそれらの相互関係が示す相違は一見して明瞭であり、すすんでたとえば低開発社会に特有な low level equilibrium trap などの経済上の図式をえがくことも可能である。

発展した社会と低開発社会とを対照的に示すに便利な経済上の諸変数は、しかしただちに低開発社会が発展への軌道にのるために有効な手段を提供するものではありえない。たとえば低開発社会においては、発展した社会に比して貯蓄・所得の比率がいちじるしく低いことが明らかではあっても、貯蓄所得比率だけを高めれば発展に必要なその他の条件は付随的にそなわるとは考えられないし、そのうえ貯蓄所得比率を高めるためにさえ、1つではなく、多くの手段が併用されなくてはならないこともおおむね明瞭となりつつある。

問題のこうした状況は、第1に経済発展の動因および手段を誤りなくとらえるためには、経済学の道具箱にすでに指定席券をもつ経済諸変数だけでは十分ではないということと、第2に、説明されなくてはならないのは、発展した社会と低開発社会とがそれぞれもつ諸特徴の対照ではなくて、その間の推移のメカニズムなのだということとを明らかにしつつあるように思われる。

B・ホウスリッツはすでに1952年の論文でこの2つの課題を同時に提起した (B. Hoselitz, *Sociological Aspects of Economic Growth* の第1論文)。現状についてい

ば、上述した第1点については多くの作業がなされたが、第2点についてはほとんど重要な開拓はなされていないように思われる。

経済発展への社会学的接近においてしばしば援用される T. Parsons の pattern variables は、もともと発展した社会と低開発社会において対照的に示されるいくつかのディコトミーを内容としている。それらはパーソンズのいう frame of reference では単に経済関係にのみ妥当するだけではないから、経済関係以外の社会的諸関係にも広く応用することができる。したがってたとえば F. W. Riggs の “Agraria and Industria” はこのディコトミーを経済以外の広い frame of reference において、さらに当然の敷衍として、個人の社会的行動以前の思想の形態を分析するさいの基準としてまでも用いている。

政治学の分野においては、こうした観点を重視する立場が、あるいは public administration の comparative study の名において近時大幅な前進を示したことは疑うわけにゆかない。そうしてそれが経済的諸変数では説明しえない「推移」のメカニズムを説明する途上においても、多くの示唆を与えるものであることにも疑問の余地がない。しかしそれでも残る問題は、pattern variables のような分析用具は、それがいく組かの対照的な概念である結果、必然的に2つの社会の理想型を両極点に対置し、それらが相互にまざりあう亜型は当然認めるにしても、一方から他方への推移のメカニズムを説明するさいにはいまだ有利な用具とはなっていないことである。

ロストウの「経済成長の諸段階」のうちでもっとも神秘的な、という意味はその他の諸段階の特徴を示す場合に比較していちじるしく多様な経済外的変数や概念が援用されている “preconditions” の段階は、1つの段階として前後の段階から切りはなされているものであろうか。それともそれは「伝統的な」社会にリッグスのいう industria の諸様相が折り重なって侵入したために、単に説明上の技術として1つの段階を設けたにすぎないのであろうか。もし後者であるとすれば、さらに industria の諸様相のこうした殺到を説明する基本的要因は何なのであろうか。

われわれにとってさしずめ問題なのは、17～18世紀の take-off の説明ではなく、それらとどれほどの共通点があるにせよ、現代における take-off の解明なのである。D. E. Apter はガーナとウガンダにおいて2つの実験的な研究を行なった。そのさいかれが適切にも指摘したように、こうした推移を説明するさいにはいまだ決定的な

分析用具がなく、そうした方法は多くの試行的な実例が蓄積されたいえでなくては樹立しえないのである。

キューバにおける1952年ないし1957年以降の事象はこうした意味で1つの実験の素材を提供するものである。その形態的な特徴は、キューバにおける推移は漸進的な改革ではなくて革命であったということであり、さらに革命でありながら革命に関するいかなる既製のドグマからも自由であったということである。

『キューバ——1つの革命の解剖』の著者ヒューバーマンとスウィージーは、この書を新聞的なスピードと学問的な慎重さをもって書くといっている。さらに新聞的な特色として、表現が簡潔、なめらかである点と、物語風の躍動する調子とを加えてもよい。その躍動する調子は著者らがキューバでのできごとを実地に見たときの驚きと、革命の意義に対する心からの共感とを卒直に伝えたためにえられたものと思われる。ともかくこの書は近来におけるショッキングな本であり、そのうえ現代の政治・経済を理解するうえできわめて含蓄ある内容で充満していると思われる。

「歴史としての現代」を規定し、その将来を予見するにさいしてこの書はマルクシズムの方法に依拠しているが、しかし革命の分析においてこの本はそれほど学問的であるとは思われない。むしろ著者らはそうした革命の教義の例外をなすところにキューバ革命の特色をもとめ、これが将来におけるいくつかの革命のモデルになるかもしれないとは警告しつつも、自分らは事実を具体的に、なるべく素材のままですべてに伝えようと努めている。

この本を通読して第1に印象的な点はフィデル・カストロという人物のカリスマ的な資質である。著者らはフィデルを現代における最大のカリスマの権威であると断定し、フィデルほどの天才はどの時代のどこの国に生まれたとしてもかならず歴史に名を残したに違いないと述べているが、こうしたフィデルの人間像は、そうした結論をまたなくとも著者らの巧みな記述によって直接読者に伝わってくる。

第2に、キューバでのできごとは、ラテン・アメリカによくあるような単なる独裁者の交替ではなく、それが革命であったことが理解される。単なるカリスマの権威ならばヒトラーもその例としてあげられる。しかし著者らは、フィデルがカリスマではあってもヒトラーのような狂人ではない理由を述べて、フィデルの信条はいうな

らば「合理的ヒューマニズム」であるとしている。この理念は同時に著者らの信条でもあるように見うけられるが、M. Weberのこぼをかりていえば、それはzweckrationalで同時にwertrationalな政治原理であるといつてよかろう。これを示す例としてフィデルは革命の過程において、自己の生命は償却資産のように取り扱い、他人の生命は至上の価値として認めていたと理解しなくてはどうしても論理的に矛盾するところがあらわれてくる。フィデルはすでに26才のとき、革命にたおれた仲間の命は尊くて、敵の命を引きかえにもらったとてつぐなえるものではないが敵の命は求めないと宣言している。これほどすぐれた生命の評価は、おそらくキューバの革命がかつての革命史のなかでも代表的なものであることを立証している。

第3に、キューバの革命が、zweckrationalでありつつもきわめて即物的であったことを示すものとして、著者らはそれがイデオロギーから自由であったことを述べている。この点はJ. P. サルトルが革命後のキューバを訪問したさい早くも明敏にとらえ、フィデルは観念的に自分の信条や戦略を規定するよりさきに、まず「しなければならぬことをした」にすぎないと述べている。すなわちキューバには革命が必要であった。いいかえればフィデルなら革命を成就させ、他の者なら革命に手をつけないうか、または手をつけてもそれを破滅させたであろうような条件がそこには熟していたのである。キューバの一般住民の苦境はだれの目にも明らかであったが、世界銀行調査団の報告書や米国商務省の報告書が示した経済発展への諸方策は、そのいずれがまさるとも判明しなかった。おそらくはそのどちらもありげなものであったろう。けれども両報告書のなかには、キューバの子供らにはだしの足から侵入する寄生虫におかされて死ぬ数を決定的に減少させるにたる方策が書かれていなかったということも事実であった。

キューバの共産主義者は、フィデルのヘテロドックスな教義に対してはたえず批判的であったが、フィデルの方は自己の共産主義に対する態度をついぞ明らかにしなかった。著者らの観測によれば、もしフィデルが共産主義を否定する意志を表明したとすれば、建設的に活用しえたし、現にまた活用しているかれらの協力をえられぬことになったであろうし、逆に容共的な立場を明らかにすれば、米国その他の反対勢力にかっこの口実を与えることになったであろう。

フィデルのこうした柔軟性にはフルシチョフも驚嘆し

たのかもしれない。著者らが真偽不明の報道として伝えるところによると、フルシチョフはフィデルと会見したのち、「フィデルが共産主義者であるかどうかは不明だが、自分がフィデル党であることだけはたしかである」と語ったという。

第4に、しかし革命は、そうしておそらく革命を伴わない低開発社会からの「脱出」さえも、1人のカリスマの力のみによっては可能ではない。反対にカリスマとは、その条件として大衆の熱意を結集して一定の方向にさし向ける魅力のある者でなくてはならない。著者らの記述によれば、フィデルらの革命軍が政府軍に敗れて、一時は12名となった仲間がシェラ・マエストラの山中にこもった時以来、かれらを救い、助け、やがて革命軍に加わってバチスタ政権を打倒する勢力となった中核は一貫して農民であった。革命を欲するほどに——とはいえ農民自身は革命を発想はしなかったが——しいたげられていた国民の大部分は季節的賃金労働者としての農民であったという事実から、フィデルはこの階級をもっとも身近な味方とし、かつ「合理的ヒューマニズム」の多くの具体的活動を通じてかれらの信頼を獲得していった。このことは革命——そうしてtake-off一般もそうであるが——がいかに幅広い大衆を基盤とし、かつその熱意を動員するためにはいかに巧妙な戦術が構成されなくてはならないかを示しているように思われる。

第5に、本書の後半では、反革命運動と関連して、米国の帝国主義的政策がいかに中南米国民の利益を妨げ、米国独占資本が国策を動かしていかに米国の破滅の淵においやってゆくかが間接に示されている。こうした記述はいかにもマルクシズム的な感じがし、一部の読者におそらく最大の抵抗を感じさせる部分であると思われる。しかし論証の過程はどうあろうとも、中南米での米国の政策が現にかならずしも成功していないということは事実であり、資本主義者といえどもこの記述から学ぶべきところは多いと思われる。

以上わずかな問題にかぎって本書の内容の一部を紹介したが、それは本書が経済発展の問題に関しても含蓄をすべて説明するにはほど遠く、まして本書のもつヒロイズムのふんい気や西部劇的痛快さはその一部すら伝えようがなかった。この本は寝ころんでいても読める。しかしあらゆる意味で第一級の読物であることはまちがいない。

(調査研究第二部所員 小出厚之助)

S・ボスキー著

『開発銀行の業務とその諸問題』

Shirley Boskey. *Problems and Practices of Development Banks*. Published for the International Bank for Reconstruction and Development. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1959. xi+201 p.

世界銀行は低開発国の経済発展およびこれらの国に設立された開発銀行、さらに先進国の開発銀行の業務に資するため、各種の出版物を刊行している。本書は W. Diamond の *Development Banks* について、各国の開発銀行について論じたものである。

前著と本書との比較を述べれば、前者は開発銀行の目的や機能を解明しようと努めたやや理論的色彩の濃いものであるのに対し、本書は各国の開発銀行が経験した諸問題とそこで採用された解決方法のなかから一般に共通すると思われる課題を抽出し、それに解答を与えるという方法でかかれたやや実践的色彩の濃いものである。

1958年5月、世界銀行は12カ国の開発銀行担当者および International Finance Corporation からの職員を招いて開発銀行が当面する問題を討議する会議を開催した。本書の素材はその多くをこの会議の討論から得たものである。

リロ・リンケ著

『コントラストの国エクアドル』

Lilo Linke. *Ecuador: Country of Contrasts*. London: Oxford University Press, 1960. x+193 p.

その名の示すとおりエクアドルは赤道直下、ラテンアメリカ諸国中最小の共和国である。著者は、各種の政府機関に加わり、中央銀行に協力して過去15年間この国に住み、国のすみずみまで旅をした。豊かな経歴をもつ著者が、地理、住民、歴史、政治、政党、憲法、インディアン問題、社会階級、衛生、教育、文学と芸術、宗教、交通、生産活動、財政金融、国家財政、対外関係、軍隊と、この国のあらゆる問題を概観したのが本書である。

赤道直下の沿岸地帯でも、海拔何千メートルにも達するシエラ山脈帯でも、ともに生存のための闘争は厳しい。科学と教育がその闘争を漸次緩和してはいる。だが住みよい国や進んだ国の状態に追いつくまでには前途ほど遠い。その主たる障害は何か——著者は本書の中でこれを探る。そして人的な障害も自然の課せるそれもすべては克服不可能なものではない。いまやこの国の秘められた可能性は開発されるのを待っている——と結論する。